

分裂と光

作・小佐部明広

【登場人物】

山崎青葉

女1・山崎 茜（青葉の妹）

女2・山崎 緑（青葉の母）

女3・小宮山 由佳（青葉の元同級生）

男1・安西 信作（青葉の幼馴染）

男2・林 章太郎（茜の仲間）

男3・飯島 忠雄（医師）

舞台には、簡単に移動できるベッド代わりにの台。壁には、これから舞台で使われる衣装や小道具が掛けられたり置かれたりしている。

1

電車の座席でうたた寝をしていた山崎青葉が目覚める。

少しの間、ぼーっとしている。

ガタンゴトン、ガタンゴトン、という声が聞こえている。

青葉 目を覚ますと。風景が流れていた。私はどうして？ どこへ？
ここは？

紙かダンボールで作ったような冠をかぶった飯島が、本を数冊持って立っている。

飯島 どれが好みかな？

青葉 ？

飯島 （本を見ながら）純愛。サスペンス。ファンタジー。ナンセン

ス。それから……。

青葉 なにか。壮大な物語を。

飯島 なるほど。（探す）

青葉 ああ。ここは。

飯島 あるひとつの世界。

青葉 ひとつの？

青葉のうしろを、章太郎が電車と同じスピードで走っている。

青葉 誰かが。ずっと私を見ている。窓越しに。電車と同じ速さで走っているのだろうか。あなたは。何を言っているの。聞こえない

2

い。

飯島は、本を床にぶちまけてしまう。

飯島 ああ……。

飯島は拾うことをあきらめて離れていく。

青葉の後ろを走っていた章太郎が青葉の隣に座る。

章太郎 追いついた。

青葉 誰？

章太郎 章太郎だよ。

青葉 ああ。

章太郎 手を握ってもいい？

青葉 うん。

青葉 手を握ろうとすると、

何人もの人間が青葉のところへ走ってやってくる。

青葉 誰？

人々 章太郎だよ。

青葉 え？

人々 手を握ってもいい？

章太郎 青葉、章太郎は僕だよ。

と言うと、人々は口々に「僕が章太郎だ」「章太郎は私だ」などと言う。

青葉は全員から距離をとろうとするが、全員青葉を追ったりしながら、自分が章太郎であると主張し続けている。

章太郎が青葉の手を握る。

青葉 あ。

章太郎以外は全員他人となり、それぞれ電車内で過ごしている。

章太郎 思い出した？

青葉、うなずいて、章太郎の手を握る。

章太郎 ふと、誰かのことを思い出して。今まで、その人を忘れて

いたこと。悲しく思うこと。ある？

青葉 忘れないよ。

章太郎 でも。死ぬまで思い出してもらえないことの方が。もっと

悲しい。

章太郎は、梨を持っている。

章太郎 いつか、青葉にあげる。

青葉 梨？

章太郎 嫌い？

青葉 梨は好き。

飯島 愛情なんてものを信じてはいけませんよ。

青葉 ？

飯島 愛なんて幻なんです。

青葉 乗客たちが。何かを相談している。

飯島 あなた今、命を狙われていると思ったでしょ。

青葉 ……。

声 まもなく六条高校前。六条高校前でございます。降り口は右側です。

飯島 あなた今、命を狙われていると思ったでしょ。

声 プシュー。(扉があく)

人々は青葉に襲いかかるが、青葉は電車を降りて逃げようとする。人々はその勢いのまま章太郎を襲っていく。

青葉 章ちゃん！ 章ちゃん！

章太郎は人形のように沈んでいく。人々は青葉に接近し、青葉はやがて人々に囲まれてしまう。

囲んでいた者たちが一斉に座ると、そこは教室。

先生である飯島が青葉に話しかける。

飯島 山崎さん？

青葉 (立ち尽くしている) あ、え？

飯島 わからない？

青葉 あ、えと、

波の音が聞こえている。

青葉、足元に水があることに驚いている。

同級生である小宮山由佳が小声で話しかけてくる。

小宮山 蚊の言葉がわかります。

青葉 え？

小宮山 蚊の言葉がわかります。

飯島 わからないかな？

青葉 「蚊の言葉がわかります。」

飯島、拍手。

ほかの者たちも拍手して、なにか喋っているが、支離滅裂な言葉のため青葉には理解できない。

青葉の妹・山崎茜が話しかけてくる。

茜 私の言葉わかる？

青葉 え。あ。

茜 あ、やば、そろそろレッスンの時間かな。

青葉 すごいよね、事務所なんか入って。女優になんの？

茜 ドラマもいいけどやっぱミュージカル！

青葉 あ、

青葉と茜、飛んでいる蚊を目で追う。

茜、ぱんつと手を合わせて蚊を潰す。

茜はブラームス『ハンガリー舞曲第5番』のメロディで歌い始める。
ほかの人々も歌ったり踊ったり。
青葉は取り残されている。

茜 ♪人生は 素晴らしい

自由で 無限大

ハーブを食べて

元気を回復さ（ハイ！）

友達は 宝物さ

ポジティブで 怖いもんなしさ

ネクラなやつに ひきずられたりするけど

そんなやつは追い出して 楽しもう！

ドラマが始まっている。

そこには青葉の妹・山崎茜、その仲間の林章太郎が出演している。

刑事を演じる茜と、殺人犯を演じる章太郎。

章太郎は梨を持っている。

青葉はよくわからないなりにセリフを言う。

茜 ……ずっと黙ってるのね。

章太郎 ……刑事さん、僕じゃないんです。

青葉 そうは言うけどさ、

茜 私もそう思ってる。

青葉 まあ、そうだね。

茜 不完全な家庭、そして貧困。あなたは悪くない。

章太郎 （何か見つける）あ。

茜 ……蚊ね。（叩き潰そうとする）

章太郎 やめて。

茜 ……。

章太郎 叩き潰さないでください。その蚊は、僕たちなんですから。

茜、章太郎の持っている梨を手にとる。

茜、章太郎と見つめ合う。そしてキスしようとする。

青葉は大声をあげ、妨害する。

小宮山 はいカット。

ドラマ撮影の現場はしらけ、青葉はいたたまれない。

監督である小宮山が近づいてくる。

小宮山 あなた宇宙についてどう思う？

青葉 宇宙……？ あ、宇宙は、全てを知っています。

小宮山 言葉はわかる？

青葉 蚊の言葉はわかります。

小宮山 あなたは知り過ぎた。

青葉 違います！ 知りません！ 何も知りません！

小宮山は青葉をベッドの上に倒し、拳銃をつきつける。

パンツ、という声。

青葉はベッドの上で目覚めている。

近くには飯島がいる。

その空間では、他の人々が踊ったり遊んだり自由に過ごしている。

全力で歌っている者や、全力で走っている者。

ひとりごとの激しい者など。

青葉 (あたりを見渡す) ああ。

飯島 おはよう。

青葉 演技をしました。そしたら拳銃で。

飯島 うん、悪い夢を見たようだ。

青葉 (飯島の冠が気になる)

飯島 ああ、(脱ぐ) これはね他の患者さんにもらったんだ。似合うかな。

青葉 ……わかりません。

女1が近づいてきて話しかけてくる。

女1 教えてくれませんかどんな夢か。

青葉 あなたは…私の妹？

女1 ……違うと思います。が、それでもいいですよ。

青葉 ああ。

女1 夢は？

男1が近づいてくる。

男1 (女1に) この人は俺のことが好きなんですけど。俺にはその気がないんです。そう言ってくれませんか。

女1 はい、言っておきます。

男1 (青葉に) きみは、俺のことが好きなんだろう。

青葉、女1に赤いヘアバンドを渡す。

青葉 私の妹は、これをつけなきゃいけないんです。髪が目に入るとイライラするんです。

女1、ヘアバンドをつける。青葉の妹・山崎茜となる。

男1 残念だけど、俺にはその気がないんだ。

青葉、無視して男1に青いスカーフを渡す。

男1、スカーフをつける。青葉の幼馴染・安西信作となる。

青葉は、同じ空間にいる女2のところへ行き、緑のカーディガンを渡す。

女2はカーディガンを着る。青葉の母・山崎緑となる。

青葉 夕暮れのベンチは。私たちを待っていた。いつもそこで。あと何回。あと何回。座れるんだろう。この人の隣で。それとも。大人になっても。ずっと。ずっと。二人じゃなくて。三人で。子供と一緒に。なんて。空想してたけど。空想だったけど。その空想の時間が。今思えば。あのときの人生だったなああって。

公園のベンチに座っている、青葉と信作。

青葉 なー信ちゃん、

信作 ん？

青葉 大学いくの？

信作 まーな。

緑と茜がいるが、信作には見えていない。

緑 やっぱり大学くらい行つといたら。

青葉 お金と時間もつたないよ。

緑 でもねえ。

青葉 来年から家にお金入れるよ、茜もあれだし。

茜 あれって。

青葉 (信作に) 女優になんだって。私の妹。

信作 マジ？

青葉 知らない間にオーディション受けて知らない間に事務所入った。お母さんも知らなかったし。レッスンとか受けてんの。

信作 すげーな。

茜 やっぱ人生やりたいことやんなきゃ。

緑 そうね。

茜 姉ちゃんも家でだらだらゲームやってないでミュージカルやろうよ。つか彼氏つくんなよ。今度雰囲気イケメンの役者仲間紹

介しようか？ 雰囲気イケメンだけど。

青葉 (信作に) バカな妹だけどね。絶対社会でたらやってけない。

信作 はは、

青葉 働きなगरらさ、イラストとか描いてさ。

信作 それ系の仕事にはしないの？

青葉 向いてないんじゃないかな。仕事としてのあれっていうか。もっと。アーティストとしてのあれっていうか。ネットにアップ

してさ。拡散されたりしてさ。それくらいでいいよ。

信作 青葉は得意なことあっていいよな。

青葉 信ちゃん将来どうすんの。

信作 うーん、

青葉 信ちゃんはさ、大学行って好きなこととか得意なこととか見つけて、それ仕事にするといいよ。きつとお母さんとかお父さんとかそう思ってるよ。仲のいい人と結婚してさ、おしどり夫婦だ

よ。私は将来こうなろうとかなないし、家にお金入れんの。お母さん大変だし。

緑 そんな大変でもないよ。養育費も家のローンもあの人が払ってくれるし。当然だけどさ。先生やってるのも楽しいし。

青葉 お母さんのピアノ好きだよ。とは言えなかったけど。

信作 青葉ってどういうとこ狙ってるの？

青葉 私、信ちゃんと結婚するよ。

信作 へーそっか。

青葉 私、信ちゃんと結婚するよ。

信作 いろんな仕事があるんだね。

青葉 私、信ちゃんと結婚するよ。

信作 決まったら就職祝いしなくちゃな。

青葉 私、信ちゃんと結婚するよ。とは言えなかったけど。
信作 あのさ。父ちゃんと母ちゃん、別々に生きてくんだったって。

青葉 ……。

信作 なんか。そっかって。

青葉 ……。

信作 青葉と同じだ。

青葉 ああ。

信作 でも、なんにも変わらないよ。

青葉 うん……。

信作 俺は母ちゃんいなくなっちゃうけど。

青葉 私がいるだろ。とか、言えばよかったかな。

信作 ま、なんとかなるよ。

青葉 うん。

信作 大学、やめよつかな。青葉みたいに。

青葉 歪んでいる。と思った。信作の顔。見たことのない。信作の

顔。そんな顔するんだね。とは言えなかったけど。

信作 なに黙ってたんだよ。

青葉 とか思われたかな。

信作 なに黙ってたんだよ。

青葉 とは言わなかったけど。

信作 なに黙ってたんだよ。

青葉 なに黙ってたんだよ。いつもみたいに、元気出せよ。

信作 うん、じゃあ元気くれよ。

青葉 ええ？

信作 元気注入！みたいな。

青葉 バカじゃないの。

信作 バカだよ。

青葉、信作を抱きしめる。

青葉 もし私が信作だったら。きっと。こうしてもらいたかったん

だろうなって。きっと。こうして。でもごめん。できなかった。

怖くて。拒絶されるのが怖くて。だから。そっけなくて。

信作 青葉は、俺を拒絶するの？

青葉 とか。思われたかな。

青葉、ふっと力が抜け、ベンチの上で寝てしまう。

青葉が目覚めると、そこは電車の中。

青葉の隣には、小宮山がいる。

小宮山 目覚めた？

青葉 ……夢ですか、今のは。

小宮山 ええ。

青葉 もしあのときの私が違っていたら。今の私は。

小宮山 わずかな差だよ。わずかな差が、大きな結果の違いを生む。

青葉？

小宮山 あなたの考えていることはわかる。宇宙はなんでも知って
いる。

ピアノの音が聞こえてくる。

ショパンの『別れの曲』。

青葉 ああ、

小宮山 あなたの好きな曲ね。

いつの間にか信作が隣に座っている。

青葉 お母さんが弾いてるの。

信作 そうなんだ。

青葉 あいつ（茜）、主演だったさ。深夜だけど。

信作 すごいじゃん。

青葉 帰らなきや。

信作 うん。

飯島が現れる。

飯島 はい、今日はその辺で。そろそろ就寝時間ですよ。
みんな はい。

3

青葉は、パソコンのキーを叩いているマネ。

信作が現れる。

青葉 ひたすらに、名前とか、性別とか、住所とか、打ち込んでる。
信作 うん。

青葉 あの空間に私はいない気がしてて、
信作 うん。

青葉 たまに話しかけられても、私かなって、
信作 うん。

青葉 でもまお金はもらえるから。お母さん少しは楽できてると思
うし。

信作 家族思いだね。

青葉 っつか、うんまあ。

信作 俺改めてさ、家族っていいもんだなって。

青葉 ああ。

信作 ま、あんなことあったけど、それでも、いや、それだから、
かな。家族をつくることの憧れってか。

青葉 ああ。

信作 結婚するんだ。

青葉 ……。

信作 リアクションは？

青葉 あごめん。おめでどう。

信作 子供は、早いな。もう少し仕事で成果出せたらかな。

青葉 ああ。

信作 でも、逆に忙しくなっちゃうかな。

青葉 ごめん勘違い。

信作 そんなこと言ったらタイミング逃しちゃうか。

青葉 私の一番は信作だったけど、
信作 じゃあもう考えなきやダメか。

青葉 信作はそうじゃなかったんだね。

信作 どう思う。

青葉 (笑顔で) 早い方がいいんじゃないかな。

信作 やっぱそっか。

青葉が寝ると自宅のベッドの上。

青葉は目を開けている。やがて起き上がる。

移動する。

青葉は白いチューリップを持っている。

緑が現れる。

緑 わ。

青葉 ……。

緑 泥棒かと思った。

青葉 ……。

緑 どうしたの？

青葉 寝れなくて。

緑 ああ。何持ってるの？

青葉 チューリップ。落ちてたから。

緑 え？

青葉 白いのが。うちの前に。

緑 ああ。

青葉 お母さんは。

緑 ん？ ああ、トイレ。

青葉 うん。

緑 ここ最近？

青葉 ……。

緑 なんか、深夜に物音する気がしてたから。

青葉 うんなんか。

緑 病院行ってみる？

青葉 仕事だから。

緑 今度の休みでも。

青葉 すぐ直るよ。

緑 そう？

青葉 うん、

緑 仕事のストレスとか、

青葉 いい人たち。全然。なんとなく寝れないだけだから。

緑 うん、まあなにかあったら。

青葉 うん、おやすみ、

緑 おやすみ。

緑 思えば。このとき。だったのかな。このとき。私が少し違えば。

青葉は。違っていたのかな。私が。もつと違っていたら。

4

青葉が現れると、茜と章太郎が現れる。

茜 あー姉ちゃんこっちこっち。雰囲気イケメンでしょ？

青葉 ああ。

茜と章太郎はコーヒーシヨップを配置していく。
青葉もその場にいることになっているが、実際その場から弾かれている。

茜 これが、(青葉を指して)

章太郎 あーはいはい、林章太郎です。

青葉 あ、はい、

茜 付き合っているとかじゃないから、

青葉 あ、

茜 恋愛とか必要ないから演技に。

章太郎 悪いことじゃないと思うけど。

茜 このミザンスどう？

章太郎 違うんじゃないか。

茜と章太郎は話しながら移動してみても、ある位置をとってみては首をかしげたりしながらまた移動する、というのを何回か繰り返す。青葉はその度になんとなく移動してみるがついていけず、やがてあきらめるようになる。

章太郎 この前なんか言ったときにさ、

茜 うんうん、

章太郎 セリフっぽいって、

茜 うんうん、

章太郎 今の俺の、セリフっぽいって、

茜 うんうん、

章太郎 忘れちゃったんだけど、

茜 うんうん、

章太郎 ない？ そういうこと。

茜 うんうん。あ、この「うんうん」みたいな？

章太郎 そういうリアリズム的なんじゃないって、

茜 リリカルな？

章太郎 シェイクスピア。

茜 あるかそんなん。

章太郎 それが問題だ、的な。

茜 (青葉に) なんか喋ったら。

章太郎 それが問題だ、的な。

茜 あるかそんなん。

小宮山が現れている。

小宮山 いらつしやいませー。

全員喋るのを止める。

青葉は小宮山に近づく。

小宮山 いらつしやいませー。

青葉は章太郎に近づく。

章太郎 そういうリアリズム的なんじゃないって、

青葉は茜に近づく。

茜 姉ちゃんもなんか喋ったら？

青葉はもう一度小宮山に近づく。

小宮山 演技を始めれば、きつとうまくいくよ。だって演技の才能あるじゃない。世界中の人たちが待ってるよ。あなたの演技を。

青葉は茜に近づく。

青葉、意気揚々とした顔。

茜 なに？

青葉 私も演技しようかな。

人々が演技の受講生として現れる。

飯島 (手を叩いて) はい。では次の演技レッスンです。みなさんは気づいたら無人島にいます。目的や状況を意識して演じてみてください。よーい、はい。

みんな、ほかの人を抱き起したり、食べ物をさがしに行ったり、すぐに動き始める。

青葉はどうしていいかわからず立ちすくむ。
動き続ける周りの人たちとコミュニケーションをとろうとするが、うまく

いかない。

青葉 あ、海だね、あ、ね、

やがて全員で、無人島でどうすべきかの会議が始まるが、青葉は入れない。

茜 具合悪いんだったら寝てなよ。

青葉 あ、うん、そうだね、

青葉は横になる。

話はまとまったようで、全員目的遂行のために散り散りになっていく。

そこは青葉の部屋。

緑が現れる。

緑 起きられない？

青葉 ……。

緑 会社に電話しとくよ。

青葉 ……。

緑は去っていく。

茜の声 姉ちゃんまた寝てんの。

緑の声 うん。

茜の声 会社大丈夫？

緑の声 まあまあ。

茜の声 行つてきまーす。

緑の声 うん。あおばー、お母さんも少し出かけてくるからねー。

青葉 ……。

青葉が気づけば電車の中。

少しして、章太郎が現れる。

章太郎 あれ？

青葉 ……。

章太郎 青葉さん？

青葉 あ。

章太郎 章太郎です。どうも。体験レッスン以来ですね。

青葉 ああ。

章太郎 いや、難しかったですよね実際。やーでも、こんなところで会えるなんて。なんか嬉しいですね。

青葉 ……。

章太郎 ぶっちゃけ見た目でいったら茜より青葉さんの方が芸能界向きだと思っただけです。もうちょっと髪型とかこだわって、ファッションとかうまい具合にしたら。実際モテませんか？

青葉 (首をひねる)

章太郎 あ、なんかすみませんガンガン喋っちゃって。なんか俺、

青葉さんのこと気になっちゃって。でなんか嬉しくって。(駅を見て) あ、僕ここなんで。じゃあ。また。

青葉 ああ。うん。

章太郎が去り、信作が現れると、そこは公園。

信作 なーんか、ようやく人生落ち着いてきたって感じかな。

青葉 ……。

信作 俺さ、やっぱり人間って、見た目より中身だと思うんだよな。

青葉 ……。

信作 優しくって思いやりのあるさ。

青葉 ……。

信作 でも俺、ほんと運がよかったなって思う。こんな広い世界の中で、この人に出会えてさ。なんつーか、今までの俺って、恋愛ってさ、自分のしてほしいことをしてくれる女性をさがしてたんだなって思ってた。でも今の人は違うんだよ。この人のために、俺はなにをしてあげられるんだろうって、思える人でき。だからなんつーか、あの人は、俺に、本当の愛ってなんなのか気づかせてくれた人なんだよ。

青葉 ダメだ…。

信作 青葉はどう思う？

青葉 気づいてない。

信作 愛って何だと思ってる？

青葉 自分が幸せに生き続けることが。他人を傷つけ続ける。そのことに。

信作 つか最近元気なくない？ どうした？

青葉 まもなく青葉の部屋。青葉の部屋です。

青葉 え？

気づくと、青葉は自室のベッドで目覚める。

青葉 ……ああ。……何時なんだろう。お母さんは。出かけたかな。

茜は……学校……？

沈黙。

青葉 ダメだ。なんにも考えられないや。

青葉、眠る前に自分が描いたであろうイラストをぼんやり眺めている。
部屋に章太郎がいる。

章太郎 青葉さん、

青葉 ……。

章太郎 青葉さん、

青葉が降りむくと章太郎がいる。

章太郎は梨を持っている。

章太郎 こんにちは。

青葉 (周りを見る)

章太郎 ごめん、インターホン押したんだけど、

青葉 ……。

章太郎 茜ちゃん、いないよね？

青葉 ……。

章太郎 あ、あげる。梨。

青葉 (受け取る)

章太郎 また会えたね。

青葉 ……。

章太郎 絵、描いてたの？

青葉 ん？ うん。

章太郎 これは……蚊？

青葉 ん。(肯定)

章太郎 へえ。

章太郎は絵を眺めている。

青葉 ……蚊はね。ぷーんって飛んで。ぱんって。殺されるの。14

飛んでるだけで。ぱんって。殺される。ここにすることが正しく

ない。人間の世界からは。弾かれる。

章太郎 (何枚かめくって) 絵本？

青葉 ん。(肯定)

章太郎 (読む)

青葉 蚊の言葉が。わかる気がする。

章太郎 (しばらく読んでから) うん、うん、面白いよ。面白いって

うか、うん、共感する。

青葉 (意外そうに章太郎を見ている)

章太郎 なんか、変なこと言っている？ 変なことっていうか……

俺たち、きつとわかりあえるよ。

青葉 ……。

章太郎 もっと読みたい、うん、また読ませてほしいな、青葉さんにしか書けない作品。

青葉 そうかな？

章太郎 たくさんの人が、待ってると思う。

青葉 ……。

章太郎は絵を青葉に返す。

青葉、章太郎の服の袖に触れたまま黙っている。

章太郎、青葉を抱きしめる。

章太郎 ……二人だけの秘密。ねえ、サインつくらない？ 例えば、

頭をかいたら「愛してるよ」。アゴを触ったら「注意してね」。咳

払いしたら「遠くに離れて」。

青葉 うん……。

章太郎 っていうのも、俺ちよつと危ないかもしれないわ。

青葉 ……？

章太郎 あ、まあ、芸能界も色々あるからさ。そんなヤバイことに

はなんないと思うんだけど。たぶん。ああ、まあ、たぶんだけど。

青葉 なに？

章太郎 うん、まあ大丈夫だよ。じゃあ。そろそろ撮影にいかなきや。

青葉 うん……。

章太郎、頭をかいて「愛してるよ」のサイン。

青葉も同じように頭をかく。

微笑み合う二人。

青葉 愛してるよ。なんて。ありがちな言葉だけど。頭をかく。なんて。よくある仕草だけど。そんなことが。とても愛おしい。なんて。思えるのは。なんだか。好きだ。

緑がいる。

青葉はドラマを見ている。

刑事を演じる茜と、殺人犯を演じる章太郎が出ている。

章太郎は梨を持っている。

茜 ……ずっと黙ってるのね。

章太郎 ……刑事さん、僕じゃないんです。(頭をかく)

茜 ……私もそう思ってる。

青葉は、章太郎が頭をかいてるのを見て、ご機嫌に体を揺らしたり、自分も頭をかいたりしている。

茜 不完全な家庭、そして貧困。あなたは悪くない。

章太郎 違うんです。

茜 恋人もいない。仲間もいない。世界から弾かれている。

章太郎 ……。

茜 私の話。

章太郎 ……？

茜 どうしてかな。世界に拒絶されてる。私も、あなたも。

章太郎 (何か見つける) あ。

茜 ……蚊ね。(叩き潰そうとする)

章太郎 やめて。

茜 ……。

章太郎 叩き潰さないでください。その蚊は、僕たちなんですから。

茜 (納得して手をおろす)

章太郎 陰謀なんです。

茜 ?

章太郎 僕じゃないんです。巨大な力が僕を叩き潰そうとして。

茜 ……。

章太郎 僕はどうなるんですか。

茜 もし有罪なら死ぬことになる。

章太郎 僕じゃない…全部あいつが仕組んで…。刑事さん…

助けてください…刑事さん…。

茜 信じていいの？

章太郎 ……あなたも、僕を弾くんですか…？

茜、章太郎の持っている梨を手にとる。

茜、章太郎と見つめ合う。そしてキスしようとする。

青葉は大声をあげ、妨害する。

緑 青葉、どうしたの、青葉。(抱きしめて) どうした。そんなに怖い

ドラマだった？

青葉 なんであいつが、なんであいつが、嘘つきだあいつは、私だ
ろ、私だろ、あいつは弾かれてなんかない、とるな、とるな、

青葉、走ってどこかへ行き、梨を持って戻ってくる。

青葉 お母さん、お母さん、これは、私のだよ、私のだよ、あ
いつのじゃない、私のでしょ、

緑 うん、うん、そうね、青葉のだよ。

青葉 ほら、そうだ、私のなんだから、あいつが持つてるのは偽物

だから、私のが本物だから、ねー？ (緑が梨を奪うのではないかと

思いつきに隠す) 私のだからね、(去っていく)

緑 そんな怖いドラマだった…？ あ。

緑、蚊が飛んでるのに気づき目で追い、軽く叩き潰す。

緑 手が。少し黒くなった。蚊の死骸。洗わなきゃ。今思えば。こ
のとき既に。なにがいけなかったのか。わからない。順調だと思
ってた。父親がいなかったから？ わからない。わからないよ。

6

青葉、自室のベッドに寝ている。

青葉 昔から。なにかあったときは。宇宙を考える。宇宙からすれ
ば。私の悩みなんて。全部小さな存在だ。無重力空間に。ただ。
身体を浮かべて。そうすると。宇宙の音が聞こえる気がした。人
間なんて小さな存在だ。なにも気にするな。そんな声。ねえ宇宙。
あなたは私のこと。全部知ってるの。私も。あなたのことを知り
たい。教えて。(手を伸ばす) あなたは。あ。あ。あ。あ！

青葉、突然起き上がる。息が荒くなっている。
伸ばした手を見ながら、息を整える。

青葉 触れた。何に？ 宇宙？ なにか、触れてはいけないものに。
触れた？

周りを見るが、特に異変はない。

青葉 気のせいかな。気のせい。気のせい。あ。

青葉、飛んでいる蚊を見つける。

青葉 (腕を出して) おいで。

蚊は、青葉の腕に止まったようだ。

青葉は自分の腕に止まっている蚊を眺めている。

青葉 (腕を出している) うん、おいしい？ (笑うようなため息) 私は

弾かないよ。

声 ……ありがとう。

青葉、驚いて辺りを見渡すが誰もいない。

声 私だよ。

青葉 誰……？

声 きみの腕にいるじゃない。

青葉 あなたが喋ってるの？

声 きみには私の声が聞こえるんだね。

青葉 (驚きながらも) うん。

声 きみくらいだよ、私のことを殺そうとしないのは。

青葉 ……あなたは、私だから。

声 気づいたの？

青葉 ……？

声 あれ、気づいてないの？ どっち？

青葉 なに？

声 いや、気づいてないなら知らなくていいんだ。

青葉 ……。

声 ききたいのかい？ きいたらショックを受けるかもしれない。

青葉 言つてよ。

声 うーん。

青葉 言わないと叩き殺す。

声 わかったよ。まあ、信じられないかもしれないし、あまり驚か

ないでほしいんだけど。

青葉 大丈夫。

声 きみは蚊なんだ。

沈黙。

声 驚いた？

青葉 いや。人間だから。

声 それが普通の反応だよ。でも、きみが絵本に書いていた通り
なんだ。

青葉 え？

声 この世界の人間の姿をした生き物の多くは、実は人間じゃない
って。

青葉 ……（やや笑いながら）うそ。

声 人間の多くは、動物や虫、植物、果ては神様や宇宙が、人間の
姿をしているだけなんだ。だいたい自分では気づいてないことが
多いけど。

青葉 ……。

声 私の声がきこえるってことは、きみは、人間の姿をした蚊なん
だよ。

青葉 （あまり信じられず微かに笑いながら首をかしげる）

声 きみが描いている蚊の絵、そして絵本の物語、あれはきみの無
意識がきみに描かせたものなんだ。

青葉 ……私、人間じゃないの……？

声 落ち込むことはないよ。人間の姿をした生き物の多くは人間じ
やないんだ。

青葉 ……そっか。なんか納得いった。

声 納得？

青葉 世界から、弾かれている気がしてたから。

声 私と同じだ。

青葉 もし、私が蚊だとして、これからどうなるの。

声 どうにもならないさ。普通の人間と同じように食事したり、恋
愛したり、子供を産むことだってできる。でも、例えば……蚊は
ハーブの匂いが嫌いだ。

青葉 あ。

声 そう。嫌いだろ？ ハーブの匂い。

青葉 うん。そういうことか。

声 でも、それくらいなものさ。

章太郎の声が聞こえてくる。

章太郎の声 あおばー。

声 私と話せることは秘密にね。無用な混乱を与えてしまうから。

青葉 うん。

声 少し離れてるよ。叩き潰されちゃたまらない。

青葉、飛んでいく蚊を目で追っていく。

章太郎が現れる。

章太郎 こんにちは。

青葉 ……。

章太郎 怒ってる？

青葉 別に。

章太郎 ごめん、演技だから。

青葉 私だって（キスは）まだなのに。

章太郎 ごめん。

章太郎、青葉を抱きしめる。

キスする雰囲気になるが、青葉が恥ずかしくてできない。

章太郎 もうやめようと思ってて。

青葉 （自分との関係のことだと思って）え……。

章太郎 あ、違うよ、芸能界を。

青葉 ……なんで。

章太郎 ちよつと、ま、なんつーか、偉い人に目えつけられちゃつて、まあ、そういうもんだって言われればそうなんだけど、許せなくて、だから、これはもう、消すしか、

青葉 (不安そうにしている)

章太郎 いや、それは殺すとかじゃなくて、でも、じゃないと、俺が消される。

青葉 (章太郎の腕をつかんで首を横に振る)

章太郎 大丈夫だよ。今日の話、誰にもしないでほしい。

声 二人で逃げるんだ。

青葉 え。

章太郎 ?

声 誰の手も届かないところまで、逃げるんだ。

青葉 逃げよう、章ちゃん。

章太郎 え?

青葉 どこか遠く。

章太郎 青葉を巻き込むわけにはいかないよ。

青葉 章ちゃんも、私のこと弾くの?

章太郎 ……ううん。

章太郎、ベッドに腰かける。

章太郎 おいで。

青葉、ベッドに腰かけると、そこは電車の中。

章太郎 ……どこに行こう。

青葉 うん。

章太郎 左手。

青葉 ん? (左手を出す)

章太郎 (その手を握る)

無言。

章太郎 俺のこの手の感触を、ずっと覚えておいてほしい。俺がいなくなっても、青葉と手をつないでいられるように。

青葉 うん。

二人、つないでいる手を、握ったり握り返したり。

章太郎 ほかのなにかを握ってしまったら、きっと俺のこの手を忘れてしまうから。青葉の左手はなにも握っちゃいけない。俺の手以外。

青葉 うん。章ちゃんの手だけ。

章太郎 ……俺、下の名前芸名でさ。名字は林で、同じなんだけど。

青葉 そうなんだ。

章太郎 でも、章ちゃんがいいよ。

青葉 本当の名前は、「しろう」って入ってる?

章太郎 ううん。でも章ちゃんがいいよ。

青葉 うん。

章太郎 この手の感触、一生忘れないで。お願いだよ。

青葉 うん。

章太郎 少し待ってて。

青葉 (不安そうにしている)

章太郎 すぐ戻ってくるよ。

章太郎は去っていく。

青葉 ……ねえ、私たちどこに行くんだらう。

声 どこにだって行けるさ。

青葉 誰にも見つからない場所にも？

声 宇宙かな。

青葉 宇宙に二人。

声 悪くないんじゃないか。

青葉 宇宙って、電車で行ける？

声 宇宙行きの電車に乗ればね。

鏡を持っている小宮山が現れる。

小宮山は青葉の隣に座る。

小宮山 ……林章太郎を知ってる？

青葉 ……。

声 青葉、この人は人間じゃなさそうだ。

青葉 え？

小宮山 私は小宮山。今、ある事件を。

青葉 事件？

小宮山 林章太郎は危うい。

青葉 え？

小宮山 ある人物が、自分の罪を彼に。

声 青葉、この人、もしかしてなんだけど、

小宮山 林章太郎はもう戻ってこない。

青葉 ……？

小宮山 彼はこの電車も危険だと気づいた。だからあなたを残して。

青葉 あなたは…何者ですか。

小宮山 彼はこれからほとんど身動きができなくなる。でも、彼は

やつらに気づかれないうちにメッセージを送ろうとしている。

青葉 メッセージ…？

小宮山 彼が以前読者モデルをしていたネンネという雑誌。そこに

暗号をしのばせてあなたにメッセージを。彼は編集者と仲が良か

ったから。私にはわからないけど、彼と通じ合っていたあなたな

らそのメッセージがわかるはず。

青葉 ……。

小宮山 あなたは自分のイラストをネットで公開しなさい。そのイ

ラストで彼や世界に対してメッセージを送るの。

声 まもなく、宇宙の街。宇宙の街。

小宮山 ついてきて。

青葉と小宮山、歩き出す。

街の人々が、ゆっくりと歩いている。

青葉 見たことのない街。

小宮山 あなた、運命って信じる？

青葉 運命？

小宮山 あなたがこれからたどる道が、既に決まっているかどうか。
青葉 わかりません。

小宮山 人間が運命と呼んでいるものって、本当は宇宙なの。

青葉 ？

小宮山 宇宙はいろんな意思の集合体。あなたに干渉しているのは比較的小さな意思。林章太郎を陥れようとしているのは、それよりもっと大きな意思。人間の言葉でいうと、神様が近い？ 宇宙の意思たちはすべての生き物がなにを考えているかわかっているし、どんな道をたどるのかも予測できている。宇宙の意思たちは、人間の意思に干渉することがある。生活をしていて、ふと何か頭に浮かんだり、自分でも思いもしない行動をとることがあるでしょう。あれが宇宙の意思がその人の意思に干渉している証拠。

青葉 ……。

小宮山 信じてないね。

青葉 それって、じゃあ私は宇宙の意思に操られているってことですか？

小宮山 今は信じられないだろうけど、あなたならだんだん気づいてくるはず。

青葉 ……。

小宮山 この宇宙には実はいくつもの世界が存在している。いわゆる平行世界というやつ。この世界と似たような世界軸が宇宙には無数に存在している。今度あなたが目を覚ましたとき、あなたは宇宙の意思によって別の平行世界で目覚めるかもしれない。そして小さな差が、大きな違いとなつて世界を変えていく。そして青葉 その人が何を言っているのかわからなかったけど。

小宮山 あなたに、林章太郎を救える？ その気があるなら協力するけど。

青葉 その言葉には、答えなければいけないかった。

小宮山 言わなくてもわかる。

青葉 ふと、章太郎と私がひとつになるイメージが浮かんだ。

小宮山 今、章太郎とあなたがひとつになるイメージが浮かんだでしょう？

青葉 え？

小宮山は消えている。

小宮山の声 それが宇宙の意思の干渉。あなたならできる、だってあなたは、宇宙と話せるんだから。

青葉 (小宮山がいないのに気づき) 小宮山さん？ 小宮山さん？ ……え？

青葉、ふと自分が知らない場所にいることに気がつく。全く見知らぬ場所。ここは地球のどこ……いや宇宙のどこかかもしれないとさえ思えてくる。

青葉 小宮山さん？ ……章ちゃん！ 章ちゃん！ ……蚊、ねえ蚊！ 誰か。ねえ、はあ、ああ、

青葉、混乱して挙動がおかしくなってくる。声をあげたりする。

警官である飯島が現れる。

飯島 どうしました？ 大丈夫ですか？

青葉 (飯島の言葉が理解できない) は、あの、あ、違う、私、あ、ニ

ホン、ニホンの、

飯島 落ち着いて。

青葉 あ、だから、地球、アース、丸い、青い、アース、ニホン、

ニンゲン、私、違う、敵じゃない、あの、フレンド、

飯島 落ち着きなさい。

青葉は男3に両腕を押さえられ、恐怖のあまり動けない。

飯島 とりあえず、近くだから交番、そこで落ち着いて、ゆっくり

話さくから。うん、一回座ろうか。落ち着いて、深呼吸してね。

青葉、ベンチに座ると、そのまま寝る。

7

青葉は展示場のベンチで目を覚ます。

茜がいる。

茜 目覚めた？

青葉 ……はい。ここは平行世界ですか？

茜 ……どうかな。

青葉 (辺りを見回す)

茜 あなたが来たいと言ってたイラスト展の会場よ。

青葉 ああ。そうだ、見たいイラストがあつて。

茜 あれ？

茜が示した先に、「宇宙の意思」というタイトルのイラストがある。

波の音が聞こえてくる。

茜は、地面が水で満たされていることに気付く。

青葉 ……ああ。ああ。これです。「宇宙の意思」っていう絵なんです。

茜 そう。どう？

青葉 あなたは何を感じます？

茜 ……なんだろう。

青葉 物語とメッセージですよ。この一枚の中に物語とメッセージが詰まっているんです。これがきつと、今の私に必要なもので。

小宮山 はいカット。

監督である小宮山が近づいてくる。

小宮山 あなた宇宙についてどう思う？

青葉 宇宙には、物語とメッセージが？

小宮山 言葉はわかる？

青葉 蚊の言葉はわかります。

小宮山 あなたは知り過ぎた。

青葉 受け入れます。宇宙が。私のために。物語とメッセージをつくってくれたんですから。私をこの平行世界に転移させて。そう

だ。メッセージを。あの世界で。メッセージを。

青葉は眠りにつく。

青葉は自室のベッドで目覚める。

青葉はさきほどの啓示を念頭に雑誌をめくり、ペンでラインを引いたりして、メッセージを解読しようとしている。

左手はずっと握り閉めたまま。

声 メッセージはわかった？

青葉 いくつか。

声 なんて書いてある？

青葉 「身動きできない」「サイン」「忘れないで」「愛してる」「注意しろ」「あ」「か」

声 あか？

青葉 あ、か、とあと一文字だと思っただけ。

声 なんだろう？

青葉 (残りの一文字を見つける) ……。

声 見つかった？

青葉 「ね」……。あ、か、ね……。

茜の声が聞こえる。

茜の声 入るよー。

青葉 (蚊に) 隠れて……！

青葉は急いで雑誌やペンを片付けようとするが、左手は握ったままなのでうまくいかない。

茜が入ってくる。

青葉 あ、ううん。茜どうしたの。

茜 体調どう？

青葉 うん、全然、(芝居で) あ、いたたた、あ、ちよつと頭痛いかも。

茜 (雑誌を手にとって) あ、ネンネじゃん、これ男もんの雑誌だよ、

青葉、すごい勢いで雑誌を奪い返し、驚きと恐れの目で茜を見ている。

茜 ……なに？

青葉、構えたまま、なにも声が出ない。

茜 あ、ごめん、まだ体調良くないみたいだね。(アゴを触る)

声 アゴを触ったよ。

青葉 え？

声 サインだ。「注意しろ」。

青葉 なんで知ってるの？

茜 え？

青葉、「注意しろ」の言葉を思い出し、

後ろ手にペンを握り、あたりを警戒する。

茜 なに？ なに？

青葉 (おびえながら警戒して) なに、どうする気なの？

茜 大丈夫だよ、落ち着いて。(咳払い)

声 咳払いだ。「遠くに離れて」。

青葉、茜から離れる。

茜 なに？

青葉 なんて茜が知ってるの。

茜 (安心させるためにおどけて) どうしたの？ 私こわい？ 食べちゃうぞー。

青葉 ……。

茜 (握ってる手を見て) なにか持ってるの？

青葉 ううん。(開いて見せて) なんも持っていない。

茜 ……ごめんね、ゆっくり休んで。

茜は去っていく。

声 ……妹はなにか知ってるみたいだね。

青葉、あたりをみて、これからどうすればいいのか考えるがまとまらず、ひとまず座るが、まだ思考をめぐらせている。

テレビから声がきこえてくる。

声 ……の住宅地近くで遺体が相次いで……被害者は……に住む
……さん……さん……さん……犯人は、10日午前3時頃、自宅
で……近くの山に遺棄した疑いが……。

声 物騒な事件だね。

青葉 うん……。

小宮山がいる。

青葉は小宮山に気づく。

青葉 (小宮山がどこから入ってきたのかわからず) え？

小宮山 状況は悪化してる。

青葉 ……。

小宮山 恐らくその3人は同じ人物に。警察が動いている。

青葉 物騒ですね……。

小宮山 そういう話じゃない。

青葉 え？

小宮山 警察が疑っているのは、林章太郎。

青葉 え？ え？

小宮山 もちろん実際に殺したのは違う人物。大きな力が働いて、
彼を消そうとしている。

青葉 ……。

小宮山 ねえ、ひとつ確認しときたいんだけど。

青葉 ?

小宮山 あなた、宇宙に触れてないよね？

青葉 ……。

小宮山 触れたの？

青葉 違うんです、そんなつもりじゃ。宇宙のことを考えて、手を伸ばしたら、あの、

小宮山 (納得する) ……あなたも危ない。さっきあなたの妹が来たでしょう。あなたを偵察しに。

青葉 ……。

小宮山 逃げた方がいい。ここは危ない。あなたは触れてはいけないものに触れた。このままだと宇宙の大きな意思に、潰される。

青葉 ……。

小宮山 玄関はあなたの妹が張ってる。

声 じゃあ窓からしかないな。

青葉 あ、あ、

声 私も連れてって。

青葉 あ、うん、

青葉は腕を出し、蚊はそこに止まったらしい。

小宮山 急いで。またやつが来る。

青葉 どこに？

小宮山 3丁目の青い屋根の家に灰色のガレージがある。そこに入ると私の仲間が潜んでいる地下シェルターへの入り口がある。合言葉は「蚊の言葉がわかります」。

緑の音が聞こえてくる。

緑 あおばー。

小宮山 早く。

青葉 うん、

青葉 裸足のまま。窓を飛び出した。2階から地面に着地したけど。痛くはない。気づかれる前に。ガレージへ。ガレージへ。すれ違 いざまに。私を見た警官が。アゴを。アゴを。触った。

声 注意しろ。

青葉 サインが。バレていた。犬の散歩をしていたおじさんが。咳

払いを。咳払いを。宇宙だ。宇宙の意思が。私たちのサインを。バラした。宇宙が。宇宙の意思が。

茜の声 姉ちゃん！

青葉 茜の声が。

仮面をつけた茜が現れる。

茜 どこに行くの姉ちゃん！ 待てよあははは！

声 捕まったら消されるぞ。

茜 よくも私に触れたね。私に。どうなるか。みせてあげようか。

茜は近くいた男3に触れる。

男3はのたうちまわり、やがて動かなくなる。

音楽。

声 妹は宇宙の干渉を受けてる。逃げて！ 逃げて！

妹は宇宙の干渉を受けてる。逃げて！ 逃げて！

青葉 再び逃げ出す。

茜歌いだす。

他の人々も歌ったり踊ったり。

茜 ♪人生は 素晴らしい

自由で 無限大

ハーブを食べて

元気を回復さ（ハイ！）

茜は青葉にハーブを近づける。

青葉、ハーブを極端に恐れる。

茜 ♪友達は 宝物さ

ポジティブで 怖いもんなしさ

ネクラなやつに ひきずられたりするけど

そんなやつは追い出して 楽しもう！

歌い終わると、青葉を残しみんな去っていく。

青葉は、なにかをガンガン叩いている様子。

信作が現れている。

信作 静かな住宅地に。激しい物音が。近い。ここから近い。僕が

走っていくと。女が。ガレージをガンガン叩いていた。

青葉 あけー！ あけー！

信作 青葉だった。

青葉 蚊の言葉がわかります！ 蚊の言葉がわかります！

信作 いや、青葉じゃないかもしれない。

青葉 あいてください！ お願いします！ 蚊の言葉がわかりま

す！ 蚊の言葉がわかります！

信作 僕はこんな彼女を見たことがなかった。でも。ガレージに懇

願しているこの人は。やっぱり。青葉。

青葉 私は仲間です！ 私は仲間です！

信作 （青葉に）青葉。青葉！

青葉、信作に気づく。

青葉 ……信作は、宇宙の大きな力の、仲間？

信作 え？

青葉 どっち？ 私の仲間？

信作 え？ ええと、（アゴを触る）

声 注意しろ。

青葉 信作も……？

信作 青葉？

小宮山の声がきこえる。

小宮山の声 彼に現場を見られたのはまずい。これ以上は無理。

青葉 じゃあ私は？

小宮山の声 大丈夫。いったん家に戻って。大きな意思の彼女への

干渉は私が弱めておいた。今は家の方が安全。

青葉 ……。

小宮山の声 物音を立てずにゆっくり歩いて帰るのよ。

青葉 はい。

青葉は去っていく。

信作 青葉は。静かになったかと思えば。突然歩き始めた。僕のほうも見ずに。なにか。大きな事件に巻き込まれたんだろうか。警察に相談すべきなのか。それとも。それとも。

8

青葉の家。

青葉はイラストを描いている。

緑の声が聞こえる。

緑の声 青葉、ちよつといい？

青葉 ん？

緑が現れる。

緑 絵描いてるの？

青葉 うん、メッセージを送らないと。それに、宇宙を変えないといけないしきさ。(得意げな顔で)ねえ、どうする宇宙変えちゃったら？ めつっちゃテレビとか来ちゃうよ。大統領とか来ちゃうかも

ね。慌ただしくなっちゃうね。お母さん、英語喋れるようになってとかなきゃダメだよ。

緑 ああ、うん、そうね。

青葉 (黙々とイラストを描いている)

緑 ……どうぞ。

緑のうしろから飯島と小宮山が現れる。笑顔。

飯島 ちよつと車に乗ってもらってもいいでしょうか。

青葉 ?

飯島 その、私たちに協力していただきたくて。ねえお母さん。

緑 青葉にとつても、お母さんにとつても、大事なことなの。

青葉 (訝しげな態度)

飯島 まあ、ちよつとした検査といえますかね。

声 ダメだ。

青葉 (声を潜めて) なに……？

声 ついて行ったら、きみも章ちゃんと同じ目にあうぞ。

飯島 さあ。

青葉 ……お母さん……？

緑 大丈夫よ青葉。

声 嘘をついてる。

青葉 あなたたちが？

緑 (優しく) なんの話？

青葉 章ちゃんはどこ？

三人は顔を見合わせる。

声 逃げる。

青葉 あ、すみませんなんでも。あの、しゃがんで、私の顔を見てもらってもいいですか？

飯島 (しゃがんで) こうかい？

青葉、飯島の顔を殴り、逃げようとする。

小宮山が青葉をつかまえるが、青葉は小宮山も殴る。

緑が青葉をおさえる。青葉は暴れている。

緑 青葉、青葉やめて、青葉、青葉、青葉！

青葉 (暴れるのをやめて) 章ちゃんはどこ……？ 章ちゃんはどこ……？

青葉、動かなくなる。

小宮山 どうしたんでしょう。

飯島 さあ、脳貧血かな。

緑 すみません、本当に。(私の)何が悪かったんでしょうか。

飯島 いや、悪いとかそういう話じゃ、まあ、そういう話は追々、

ただ、こういうのはね、原因がはつきりしないものなんです。

緑 ……娘をよろしく願います。

青葉はベッドに乗せられる。

信作と茜、緑がいる。

青葉 ……信作、私のこと、通報したの……？

信作 俺じゃないよ。

青葉 裏切ったんだね……私を……二回目だよ……。

信作 二回目？

青葉 私じゃなくて……、

茜 姉ちゃん、

青葉 茜……？

茜 もっとハッピーなこと考えよう。

青葉 ねえ茜……わかって……私はさ……茜とは違う人間なんだ

よ……弾かれた……拒絶された……茜とは世界が違うんだよ……。

茜 ほらまたそうやってネガティブになってえ。

青葉 手が動かない。ベルトで固定されているみたいだった。腰も

動かない。

緑 ごめんね青葉。

青葉 なにを謝ってるの……。

緑 ごめんね。

青葉 意味がわからないよ……。

飯島が現れる。

飯島 目覚めた？

青葉 んん……？

飯島 あなたは入院することになりました。親から許可ももらった

から。

緑 ごめんね青葉。

青葉 ああ、それで……。

飯島 具合はどうですか？

青葉 私は消されるんですか？ 大きな力に。

飯島 ……。

青葉 蚊みたいに……大きな力でぐしゃつと……つて……私蚊だった……。(少し笑う)

飯島 入院して、病気を治すんですよ。

青葉 最後まで隠すんですね。

飯島 部屋を移動してもらうね。もう少し自由にできるよ。

青葉 だってさ。みんなも帰っていいよ。

飯島 ……誰がいるの？

青葉 お母さんと、妹と、幼馴染です。

飯島 ああ。そうだね、帰ってもらうよ。

青葉 気がつく。私は真っ白い部屋にいた。あるのはベッドと。むきだしの便器だけだった。扉は鍵がかかっている。窓は叩いても割れなかった。4時間経つても1時間しか進まなかった。ここは。なんの世界？ 私は。本当に。世界から弾かれたのだ。無。ここは。無の空間。私は殺されもせず。永遠に。この空間に。茜や信作がそばにいる気もするけれど。私に話しかけてはくれなかった。大きな力のせいだ。宇宙の大きな意思は。蚊である私を容赦なく弾き。叩き潰すのだ。もういいか。それでいい。私は消えてなくなる。おやすみなさい。永遠に。それでいい。それで。

長く沈黙。

青葉 私は。8時間も考え事をしていたのに。時間は2時間しか進んでいなかった。でもそれに慣れてくると。夜が来て。気づけば朝が来るようになった。宇宙の大きな意思は。私を病気の人間に仕立て上げようとしていた。私はかたくなに否定したが。お医者さんはどうしても私を病気にしようとしていた。ある日私が病気を理解したふりをすると。お医者さんは満足した。私は病気のふりをして。わざと大声をあげたり。わざと暴れたりした。お医者さんはそのたびに対処をして。私はその対処のお蔭で症状がやわらいだふりをした。ある日。私は考えた。もしここが。本当の病院だったら。あの人が。本当のお医者さんだったら。もしそうだった場合。私がここにいる理由は。ひとつしかなかった。

沈黙。

青葉 どうして。ねえ。教えて。小宮山さん。宇宙の小さな意思。教えて。どうして私がお母さん。ごめんなさい。茜。ごめんなさい。あなたたちにとつて。私は迷惑です。ごめんなさい。あなたたちは何も悪くありません。全部私が悪いです。ごめんなさい。ねえ。宇宙。宇宙の大きな意思。私を。叩き潰してください。私を。私を。

飯島 緑、茜がいる。

飯島 なぜ……こういうのは原因がはっきりしないものなんです。が……父親がいない。いや。妹さんに引け目を感じていた。いや。失恋。いや。それもないとは言えないが。医学的な見地というよ

り、個人的なあれですが。きつと、物語が欲しかったんじゃないでしょうか。壮大な物語が。この物語のない日常に。それで彼女は。

小宮山 はいカット。

監督である小宮山が近づいてくる。

小宮山 あなた宇宙についてどう思う？

青葉 宇宙は、全てを知ってます。

小宮山 言葉はわかる？

青葉 蚊の言葉はわかります。

小宮山 あなたは知り過ぎた。

青葉 違います！ 知りません！ 何も知りません！

小宮山は青葉をベッドの上に倒し、拳銃をつきつける。

パンツ、という声。

※無料版はここまでです。ご覧くださりありがとうございます。全編はクラアク芸術堂の販売ページ（左のURL）から購入できます。ありがとうございます。

<http://www.clark-artcompany.com/public>

あとがき

この作品は、僕の実験グループ「プロト・パスポア」のために書き下ろした3つめの作品だ。今までに比べて、より主観的なつくりの作品になった。当時の構想では、愛してた人が死刑を執行されてしまう、という救いようのない結末だったのだが、構想を練っているうちに前向きなものになっていった。前向きな話を書く予定が救いようのない話になってしまった、ということとはよくあるのだが、その逆はなかなかないので、少し驚いている。何か心境の変化があったのかもしれない。基本的な構造は病院、電車、自宅の3ヶ所で目覚め、今までの出来事は夢か妄想だったのかもしれない、という繰り返しである。台本にはあまり書き込まなかったが、もつというんなアイテム（小道具）が登場すると面白くなるのではないかと思う。

物語が失われた時代らしい。僕が生まれる前は、勉強していい大学に出ていい会社に入り結婚し家庭を築き定年まで働き、老後は余生を過ごす、というストーリーがあったらしい。しかし僕が生まれたことよって（というのは冗談でバブルの崩壊によつて）そのストーリーは徐々に失われていった。なので僕たちは自分たちで自分のための物語をつくるか、もしくは誰かに作ってもらわなければいけなくなった。それは夢を追いかけることかもしれないし、企業が発する「エステで美しくなって自信を持つて生きよう」とか「英語を身に着けて世界に飛び出そう」とかいう物語かもしれない。ちなみに演劇においては、それよりもずっと前、20世紀初頭には失われ始めたらしい。（失われたというと語弊があるかもしれない。スト

ーリーとは別のところに重きを置く演劇が台頭し始めた。）それにしてもいつまでたっても物語がつくり続けられていることを考えると、やはり人間は物語が大好きなんだと思う。だから本当は物語らしい物語を書いた方が好かれるんだろうなとも思うが、僕はこの物語が失われた時代において、物語を失った作品をつくらうと思う。

大人数で盛り上がっている場にいると、その場所から弾かれないような感覚になることがある。自分がそこにいることがふさわしくない、と感じることがある。それは、「俺は正しい。こいつらが間違っているのだ。」というのとは逆で、むしろその空間やそこにいる人々はいたって正しいのに、自分のみが正しくない、という感覚だ。言ってみればそれは疎外感なのだと思うが、不思議なのは、誰も疎外してはいはずなのに、なぜか疎外されていると感じてしまうのだ。そのふさわしくなさを感じられるような舞台になればいいと思う。

相も変わらず大衆受けしなさそうな作品を書いているが、それでも楽しみに僕の作品を観に来てくれる方々がいることはとても励みになる。僕は小説を読んだり漫画を読んだりすると、「この作品に出会えてよかった。生きててよかった。」と思えるような作品にぐくまれに出会う。僕の作品も、誰かにとつてそういう出会いになればいいと思う。さあ、これからも書き続けていこう。

2018年4月2日 小佐部明広

《上演記録》

プロト・パस्पア#03 『分裂と光』

【キャスト】

山崎青葉	田中温子 (NEXTAGE)
女1・山崎茜	丸山琴瀬 (キャストイングオフィスエッグ)
女2・山崎緑	メイケ祥子
女3・小宮山由佳	脇田唯 (POST)
男1・安西信作	中村雷太 (クラアク芸術堂)
男2・林章太郎	高橋寿樹 (クラアク芸術堂)
男3・飯島忠雄	戸田耕陽

【スタッフ】

作・演出 小佐部明広 (クラアク芸術堂／プロト・パस्पア)
舞台監督 大江芳樹
舞台美術 米沢春花 (NPO法人コンカリーニョ)
照明 高橋正和
音響 小佐部明広
衣装 松島みなみ
演出助手・小道具 牧野あすか
宣伝美術 小佐部明広
制作 小川しおり (劇団 fireworks)

主催 クラアク芸術堂企画運営委員会
後援 札幌市

【日程】 2018年6月16日(土) 13時半／17時

【会場】 生活支援型文化施設 コンカリーニョ

【料金】 一般前売2,000円 22歳以下前売1,500円
当日券各500円増

※実際の上演内容と一部異なる場合があります。ご了承ください。

《『分裂と光』の上演について》

「前売入場料2000円未満」または「公演予算100万円以下」の場合
は、脚本使用料は**無料**です。それ以外の場合は、協議の上、総予算の3%程
度を脚本使用料とします。上演のお問い合わせはクラアク芸術堂企画運営委
員会まで。

【クラアク芸術堂企画運営委員会】

clark.artcompany@gmail.com

2018年6月11日 第1刷制作

小佐部 明広 (こさべ あきひろ)

1990年、札幌生まれ。北海道大学法学部卒業。2011年に「劇団アトリエ」を結成し、2017年に「クラアク芸術堂」に組織変更。人間の暗部ややりきれない部分を書くことが多いが、コメディやナンセンス、ファンタジーなど作品のジャンルは多岐にわたる。2017年から平仮名名義「こさべあきひろ」としての執筆活動も開始。『瀧川結芽子』で若手演出家コンクール2015優秀賞。

クラアク芸術堂ホームページ

<http://www.clark-artcompany.com>

